

はじめに

わたしは自分の手法をまとめるために、この本を書き始めました。普段使っている手法を整理して明確にすることは、とても意味のあることだからです。

人間は必ず間違いをおかします。特に、瞬時の判断を求められる相場（トレード）の世界では、さまざまな間違いをおかして損失を発生させてしまいます。その間違いは、明確でないゆえに間違えてしまうものと、整理されていないために混同して間違えてしまうものの2つが大半を占めます。

これから本書で紹介する取引手法は、わたしはとても優れたものだと思っています。なぜなら、自然の節理にかなっているからです。おそらく多くの人に、納得して受け入れてもらえるでしょう。その優れた手法を知りながら、体系立てて整理していないために混同したり、あやふやなものを放置していたために間違えたりしたら、大変もったいないことです。

わたしは本にまとめようと思い立ってから1年を費やして、不明確な部分を研究しながら明確なものとし、わたしのトレード手法を整理

してまとめあげました。その結果、初めに発表する予定だったものは異なる、より優れた手法が完成しました。これはわたしにとって、喜ぶべき誤算です。

本書で発表する「TFブレイクアウト」という手法は、予定していたものとは比べものにならないくらい精度の高いものになりました。まだまだ研究の余地はあり、発展性のある手法ではありますが、基礎の取引手法として発表することにしました。きっと読者のみなさんに受け入れられるものと信じています。

書名と著名について

本の題名にもなっているTFブレイクアウトは、本書で解説するトレード手法の名前です。

ブレイクアウトとは手法の種類のこと、頭についているTFは「TrendFabric」の略です。これはトレンドの構造という意味で使いました。さらに、わたしのペンネームであるTokyoFoxにかけてあります。

わたしは生まれも育ちも東京です。別にずるがしこいからキツネを名乗っているわけではありません。わたしはかなりウエットタイプの人間ですから、キツネのような賢さやスマートさにあこがれてこのペンネームを使ってきました。また、わたしは超自然現象を信じるほうで、知人のインド人占い師にペンネームを「TokyoFoxにする」と運勢が開ける」といわれたことも影響しています。

本書のなかではなるべくわたし自身の個性を出さず、手法をわかりやすく説明することに終始しました。決してキツネが化かすわけではありませので、安心してお読みください。

2003年1月

トウキョウフォックス (TokyoFox)

contents

はじめに	2
------------	---

Part 1 TFブレイクアウトの基本

第1章 TFブレイクアウトについて

1. 手法発見のきっかけ	8
2. TFブレイクアウトの特徴	10
3. ブレイクアウト手法とは何?	11
4. ティックチャート	13
5. トレンド	14
6. 押目と戻り高値	16
7. トレンド転換の原理	20
8. ブレイクアウトポイント	24
9. トレンド転換の検証	27
10. TFブレイクアウトの注意点	32

第2章 TFブレイクアウトの取引方法

1. 取引の概要	35
2. 押目と戻り高値	36
3. トレンドの転換	41
4. チャートの修正	50
5. リスクと損切り	55
6. 利食い	67
7. フィルター	78

Part 2 TFブレイクアウトの実践

第3章 為替の取引

1. 為替取引について	82
2. 為替でのバックテスト	86
3. 為替でのバックテスト	89
4. 為替でのバックテスト	92
5. 為替でのバックテスト	96
6. 為替でのバックテスト	100
7. 為替取引のまとめ	105

第4章 株式の取引

1. 株式取引について	106
2. NTTをTFブレイクアウトで売買する	107
3. 押目と戻り高値の重要性	113
4. トレンドは長く続くことがある	116
5. 損切りの重要性	117
6. 高い可能性の取引	123
7. 株式取引のまとめ	129

第5章 株価指数先物(日経225)の取引

1. 株価指数先物取引について	131
2. 日経225をTFブレイクアウトで売買する	133
3. 利食い目標値とトレイリング・ストップの併用取引	145

TFブレイクアウトの 基本

第6章 商品先物の取引

1. 商品先物とTFブレイクアウト	150
2. 小豆の取引をする	152
3. 東京小豆2001年7月限のトレード	154
4. 東京小豆2001年9月限のトレード	159
5. 東京小豆10月限のトレード	162
6. 商品先物の取引のまとめと注意	164

Part 3 TFブレイクアウトとリスクマネジメント

第7章 リスクマネジメント

1. マネーマネジメント.....	169
2. バックテスト	176
3. 集中力	177
4. コーチング	179

あとがき	182
------------	-----

免責事項

この本で紹介してある方法や技術、指標が利益を生む、あるいは損失につながることはない、と仮定してはなりません。過去の結果は必ずしも将来の結果を示したものではありません。

また、この本の実例は、教育的な目的でのみ用いられるものであり、売買の注文を勧めるものではありません。本書に記載されている会社名、製品名は、一般的に各社の商標または登録商標です。

Part 1

第1章

TFブレイクアウトについて

1. 手法発見のきっかけ

あなたはウィリアム・D・ガン（W・D・Gann）を知っていますか。彼は1900年代前半にアメリカで活躍したトレーダーで、多くのトレード手法を残しています。

わたしも知人の勧めで本を読み、ガンの手法にはまった時期がありました。特にガンアングルには神秘性を感じ、通貨、金利、株、商品など、さまざまなチャートを書いてみたものです。しかし、わたしのやり方が悪かったのでしょうか、全く儲かりませんでした。

ある時、わたしの相場の師匠である成田氏（パンローリング発行『ピット・ブル』の訳者）が、ガンはスイングチャートで財を成したことを教えてくれました。それを聞いたわたしは、それからというも

のスイングチャートの研究に没頭しました。しかし、これも思うようにいきませんでした。後に知ることになりますが、わたしはスイングチャートとカギ足を混同していたのです。

小澤公氏は、『W・Dガン著作集』の補論2でスイングチャートについて、以下のように書いています。

「見た目は鉤足に似ているが、鉤足が終値のみを対象にしているのに比べ、スイング・チャートはザラバの高値・安値を対象にする」（『W・Dガン著作集』ウィリアム・D・ガン著、日本テクニカル・アナリスト協会訳、日本経済新聞社刊、1993年）

わたしは日足の前日の高値、もしくは安値から一定値幅動いたら売買する方法を研究し、値幅を探し求めていました。この値幅は小さくすればノイズに引っかかり、大きくすれば相場に入るタイミングが遅くなります。結果的に使える値幅を見つけることはできませんでした。

値幅を探す段階でわたしは押目の値幅を測り、その平均値や最大値を使って検証を繰り返しました。そして押目に印をつけていくと、それ自体がトレンドの転換点になっていることを発見しました！ 下げトレンドは、そのトレンド形成中にできる戻り高値を上を抜けると上げトレンドへ転換し、上げトレンドは、押目を下へ割れて下げると下げトレンドへ転換するのです。

当時のわたしは、フランスの某銀行東京支店を退職したばかりで失業中でした。早速、退職金を元手にトレーディングを始めました。成田氏の紹介でシンガポールの先物ブローカーを使い、SIMEX（現在のSGX＝シンガポール取引所）に上場している日経225先物と、マージンFX（為替の証拠金取引）を取引しました。

しかし、結果は予想していたものとは違い、あまり儲けることができませんでした。理由は簡単です。勝率5割弱の手法では、高い手数料を払ったら利益が残りません。あえなく取引から一時撤退することになりました。

でも、わたしには確信がありました。わたしが発見した法則は間違っていない、何かエッセンスが足りないだけだと。その後も研究を続け、ついに完成したのがこれから本書で紹介する「TFブレイクアウト」なのです。

2. TFブレイクアウトの特徴

TFブレイクアウトは、トレンドの転換を判断するだけの方法ではなく、1つの完成された売買手法です。

TFブレイクアウトをトレンドの判断だけに使うことも可能です。しかし、それだけでは思ったように儲けることができません。

TFブレイクアウトは、ポジションエントリー（建玉をつくる）、ロスカット（損切り）、プロフィットテイク（利食い）、マネーマネジメント（資金管理術）から構成されています。トレーディングとは、ポジションを建て、ポジションを決済するまでが一連の作業ですから、1つの要素も欠くことができません。納得できる取引をするためには、すべてを理解しておく必要があります。

わたしがこの手法を使い始めた当初は、ブレイクアウトポイントだけに目がいきついで、全体のバランスを考えた取引ができませんでした。

した。ブレイクアウトポイント自体が優れた手法であったために勝率が高く、損切りや利食い目標値を気にする必要がなかったからです。

しかし、トレーディングは利益を追求するものです。より多くの利益を追求するためには、損切りポイントや利食い目標値を駆使する必要があります。

TFブレイクアウトの特徴は、明確で勝率の高いエントリーポイント、明確なロスカットポイント、非常に精度の高い利食い目標値、そしてポジションを管理するマネーマネジメントを兼ね備えていることです。

優れた手法は、ポジションを決済した時点で、爽快感や達成感を味わうことができます。それは、底値圏で買うことができ、高値圏で売ることができるからです。1000円の値幅のトレンドで、50円程度の利益を上げても快感を味わうことはできません。絶妙のタイミングで決済することができるから味わえる優越感なのです。自画自賛になりますが、この優越感や爽快感を味わえることが、TFブレイクアウトの最大の特徴といえるでしょう。

3. ブレイクアウト手法とは何？

「TFブレイクアウト」の“ブレイクアウト”とは、ある価格まで上昇したら買い、ある価格まで下落したら売る手法のことをいいます。底値を狙って買いの指値注文を入れたり、天井を狙って売りの指値注文を入れる手法ではありません。

だれでも、相場が上がると思えば買いポジションを建て、相場が下がると思えば売りポジションを建てます。売買の判断基準は人それぞれあるでしょうが、絶対に天井では売れないし、底値では買えないとわたしは思っています。なぜ、その価格を天井だといえるのでしょうか？なぜ、その価格が底値なのでしょう？この問いに明確に答えることができる人はいないはずです。底値や天井を正確に予測することは、絶対に不可能なのです。

底値や天井を正確に予測するという不可能なことを追求するのも1つの生き方かもしれません。しかし、トレーディングで儲けたいと考える人とは別の生き方でしょう。儲けることを優先するトレーディングでは、上げトレンドになった時点で買えばよいし、下げトレンドになった時点で売ればよいのです。不確実で可能性の低い段階で、大事な資金をリスクにさらす必要などありません。

ブレイクアウト手法では、ある価格まで上昇したらトレンドが上げに転換したと判断して買いポジションを建て、ある価格まで下落したらトレンドが下げに転換したと判断して売りポジションを建てていきます。この“ある価格”のことを、本書では“ブレイクアウトポイント”と呼びます。

ブレイクアウトポイントは、“エントリーポイント”と呼ぶこともあります。ブレイクアウトポイントでは、トレンドが転換したとしてポジションを建てるため、「相場に入る」という意味でエントリーポイントと呼ぶこともあります。本書では状況に応じて、両方の呼び方を使っていきます。

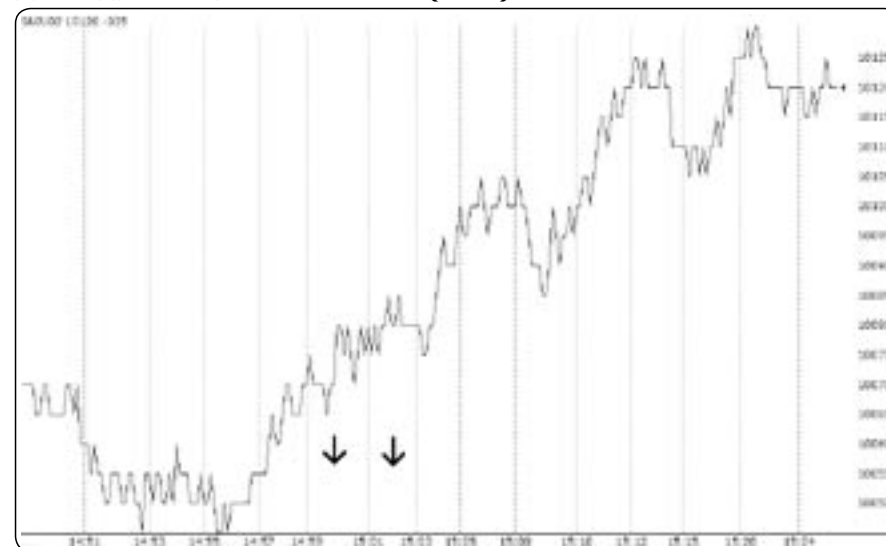
4. ティックチャート

TFブレイクアウトの基本構造については、ティックチャートを使って説明することにしましょう。ティックチャートを知らない人もいると思いますので、簡単に説明しておきます。

ティックチャートとは、取引時間中に約定されたすべての価格を、線で結んだものです。図1-1は、2002年7月某日のSGX（シンガポール取引所）日経225先物のティックチャートです。

図のヨコ軸にある時間をみてください。14：59から15：01までの時間の間隔と、15：01から15：03までの時間の間隔に違いがあります。同じ2分間ですが、片方は広く、もう片方は狭くなっています。ティックチャートは、約定されたすべての価格を順番に線で結んでいくた

図1-1 日経225先物のティックチャート(SGX)



め、時間を無視するのです。

基本構造の説明では、ティックチャートを使います。それは時間の観念を排除するためです。日足や週足を使うと、そのなかに時間の観念が入ってしまいます。日足の場合、その日に約定されたすべての価格が1本のバーのなかに凝縮されてしまいます。そのため、単純に高値と安値だけを見ることができません。その点、時間の観念が入っていないティックチャートは、単純に高値と安値をみることができるので、基本構造の説明に最適なのです。

5. トレンド

TFブレイクアウトは、独自のトレンド観の上に成り立っています。TFブレイクアウトを理解するためには、まず、このトレンド観を理解しておかなければなりません。

相場の世界では、トレンドという言葉は傾向や方向性を表すものとして使われています。しかし、どの状態が上げトレンドで、どの状態が下げトレンドなのかという、明確な基準がありません。そこで、わたしなりの基準を作ってみました。

本書ではこれを“トレンドの定義”とします。

トレンドの定義

- ・ 上げトレンドとは、高値を更新して、安値が切り上がった状態
- ・ 下げトレンドとは、安値を更新して、高値が切り下がった状態

図1-2 上げトレンド

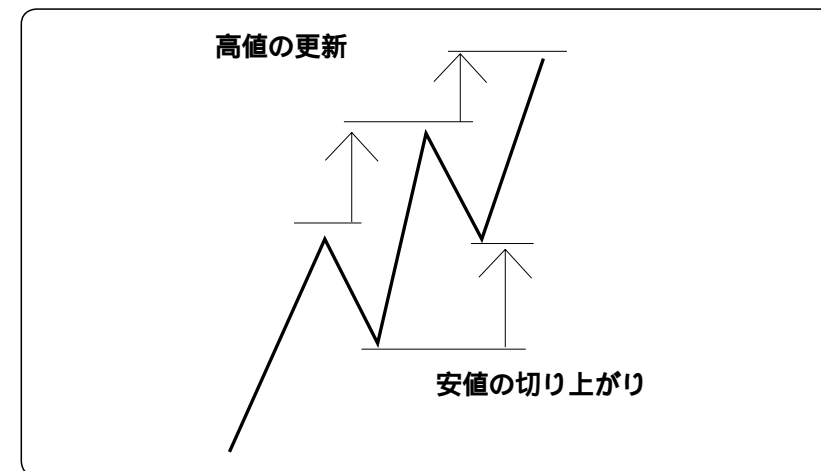


図1-3 下げトレンド

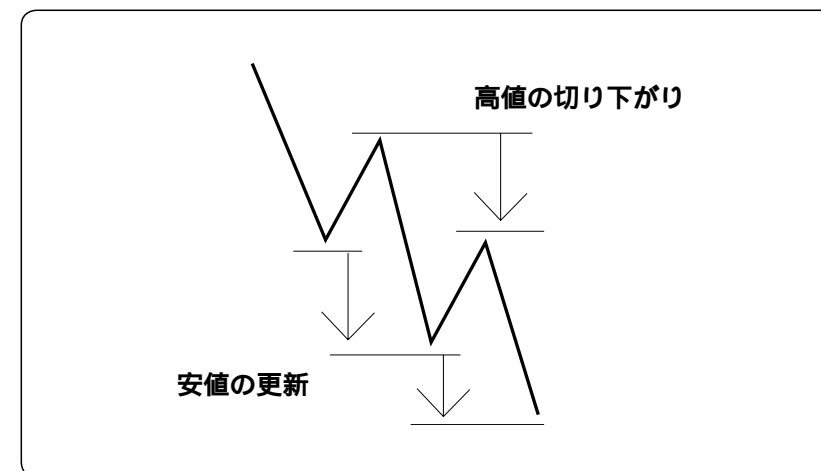


図1-2をみてください。直近の高値がその前の高値を上回っています。これが高値の更新です。安値の切り上がりは、直近の安値がその前の安値よりも上にある状態をいいます。この2つの条件が確認でき

れば、「上げトレンド」ということになります。

図1-3は直近の安値がその前の安値を下回っています。これが安値の更新です。高値の切り下がりとは、直近の高値がその前の高値よりも下にある状態をいいます。この2つの条件が確認できれば、「下げトレンド」ということになります。

上げトレンドの安値の切り上がりとは、押目の切り上がりと言い換えることができます。同様に、下げトレンドの高値の切り下がりとは、戻り高値の切り下がりと言い換えることができます。

この押目と戻り高値は、TFブレイクアウトでは非常に重要なポイントですから、もう少し詳しく説明することにしましょう。

6. 押目と戻り高値

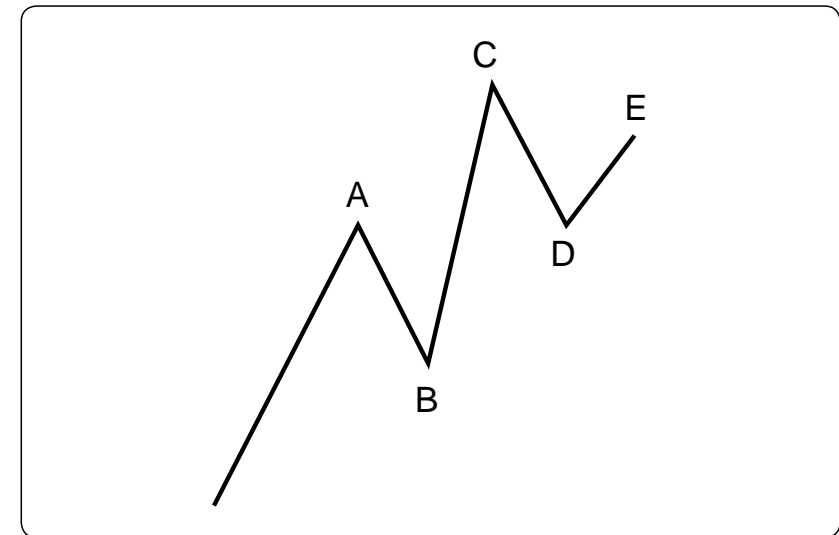
TFブレイクアウトでトレンド転換を判断する基準は、「押目」と「戻り高値」です。

一般に上げトレンドにできる安値を「押目」といい、下げトレンドにできる高値を「戻り高値」といいます。しかし、TFブレイクアウトでは、一般にいう押目や戻り高値のなかでも、特殊なものだけを「押目」「戻り高値」と呼んでいます。これも、独自の定義をしますので、まずこれを覚えてください。

「押目」と「戻り高値」の定義

- ・押目とは、上げトレンドにできる安値で、直近の高値と、その前

図1-4



の高値の間にある安値をいう。ただし、直近の高値は、その前の高値よりも、高くなければならない。

- ・戻り高値とは、下げトレンドにできる高値で、直近の安値と、その前の安値との間にある高値をいう。ただし、直近の安値は、その前の安値よりも、安くなければならない。

直近の高値や直近の安値の直近とは、手前という意味で使っています。必ずしも一番近い高値を意味するものではありません。

定義を言葉だけで理解することは困難でしょうから、図を使って説明します。図1-4をみてください。この図の状態を上げトレンドと仮定します。直近の高値Cと、その前の高値Aとの間にある安値Bは押目です。直近の高値Cはその前の高値Aよりも高く、Bは上げトレンド

に抜けても、トレンド転換にはなりません。Fが戻り高値Bを上を抜ける過程でできた安値にすぎないからです。

以上の点を踏まえ、第2章以降から実践に近い形で取引の説明をしていきましょう。

第2章

TFブレイクアウトの取引方法

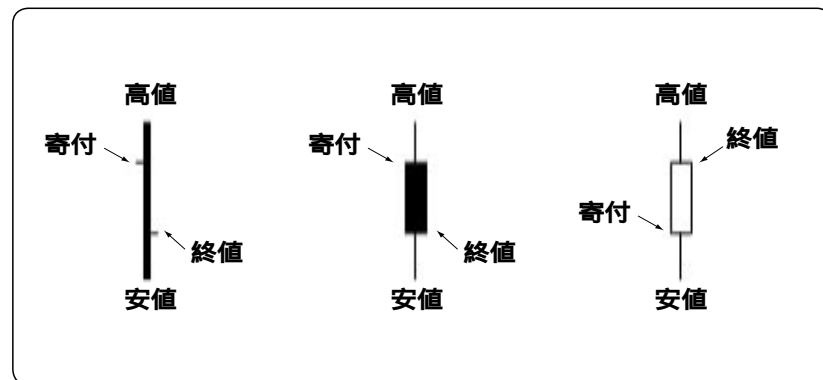
1. 取引の概要

TFブレイクアウトを使って実際に取引する場合は、「利食い目標値」「損切り」「チャートの修正」などを使うことになります。ここではそれらについて説明していきます。

バーチャートの見方

第2章は、バーチャートを使って解説していきます。実際の取引は日足や時間足を使うので時間の観念が入ります。時間の観念は無視することのできない要素です。チャートは寄付、高値、安値、終値がわかればよいので、あなたが使用するチャートはローソク足でもかまいません。わたしは使い慣れているので、バーチャートを使用していま

図2-1 バーチャートとローソク足の見方



す。バーチャートになじみのない読者もいるでしょうから、ここで簡単にバーチャートの見方から説明しておきます。

図2-1をみてください。一番左がバーチャートで、中央と右がローソク足です。バーチャートの寄付は、バーの左側に表示し、終値は右側に表示します。ローソク足であれば、足を塗りつぶされているときは寄付が上で終値が下となり、塗りつぶされていないときは寄付が下で終値が上になります。バーチャートとローソク足ともに、一番上が高値で一番下が安値なのは同じです。

2. 押目と戻り高値

TFブレイクアウトのトレンド転換は、押目と戻り高値を使って判断します。基本構造のなかでも押目と戻り高値について説明しましたが、押目と戻り高値は重要ですから、バーチャートを使ってもう一度

確認してみましょう。

押目

図2-2をみてください。キヤノン(7751)の日足チャートです。TFブレイクアウトで定義する押目は、直近の最高値とその前の高値とにある安値を指します。このチャートで直近の最高値はCで、その前の高値はAですから、AとCとにある安値Bが押目です。

押目を判断するとき、特に注意しなければならないのが、直近の最高値です。直近の最高値は、その前の高値と比べて、必ず直近の最高値の方が高くなければなりません。ただし、直近の最高値が同値の場合は、2つの高値の間にある安値を押目とします。

図2-2 キヤノン(7751)の日足

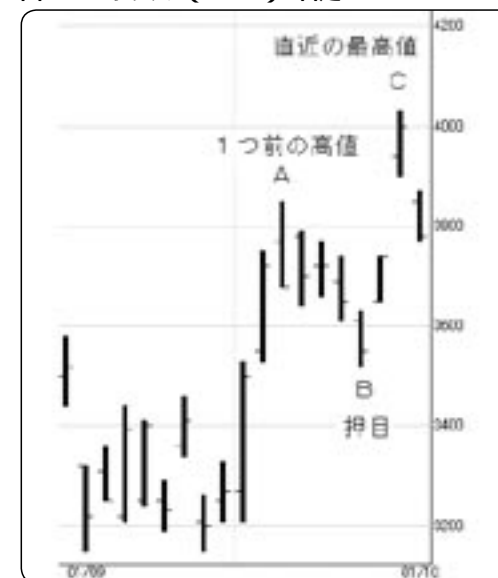


図2-3

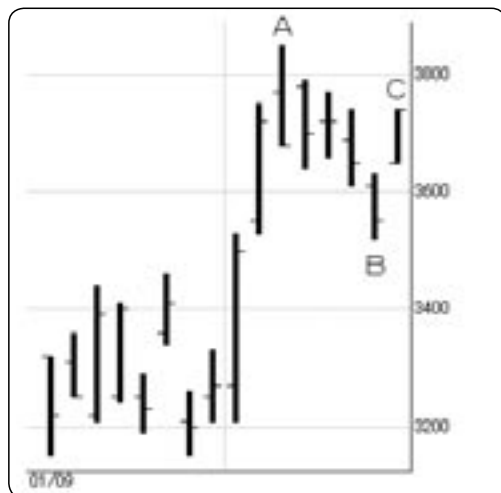


図2-3をみてください。直近の最高値はAで、CはAの高値を更新していません。この場合、Bは押目となりません。Bが押目となるのは、Aの高値が更新されたときです。

戻り高値

図2-4もキャノンの日足チャートです。戻り高値は、直近の最安値と、その前の安値との間にある高値を指します。このチャートで直近の最安値はCです。そして1つ前の安値はAです。このAとCの間にある高値Bが戻り高値になります。

図2-5をみてください。このチャートで直近の最安値はEで、その前の安値はCです。したがって戻り高値はDです。GがEの安値を更新していませんので、Fは戻り高値になりません。しかし、直近の最安値Eが更新されると、Fが戻り高値となります。

図2-4

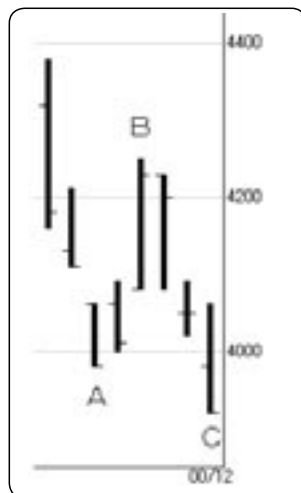
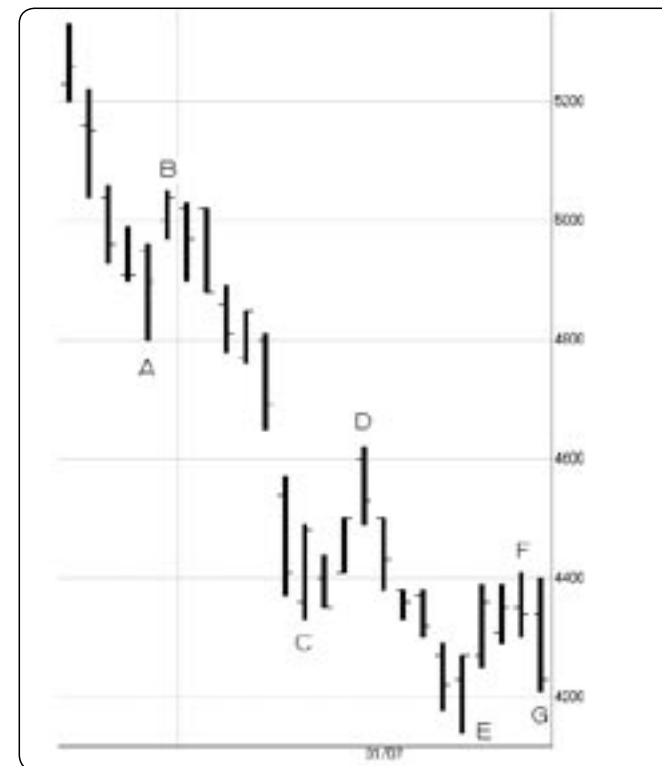


図2-5



ティックチャートとの違い

バーチャートを使った押目と戻り高値の判断は、ティックチャートを使った場合と違うところが1つあります。

その違いとは時間の観念です。ティックチャートとは違い、バーチャートには時間の観念が入っていますから、押目や戻り高値の判断でもそれを考慮に入れなければなりません。

図2-6をみてください。Eは一見すると戻り高値のようにみえます。

図2-6

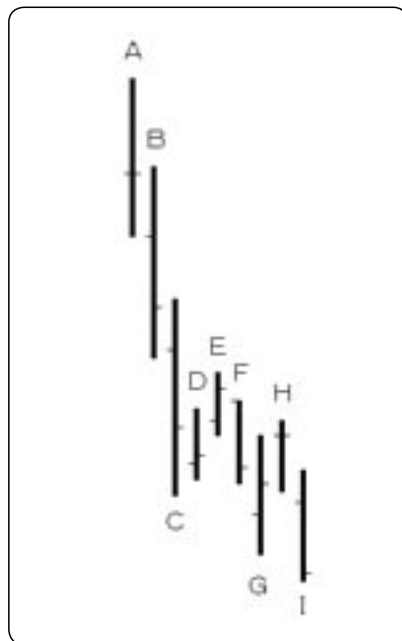
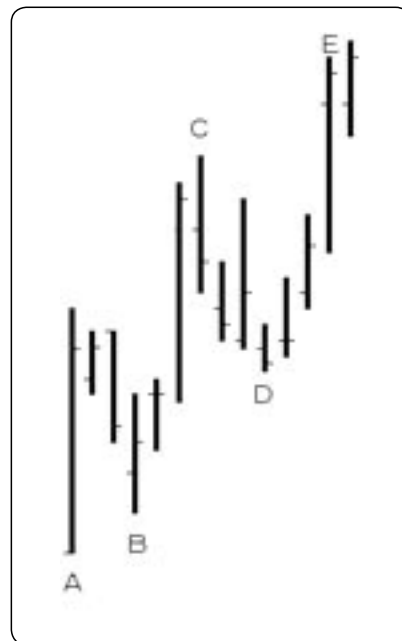


図2-7



しかし、EはTFブレイクアウトの戻り高値ではありません。なぜならば、直近に安値をつけたCバーの高値を上には抜けていないからです。

バーチャートには時間の観念が入っています。1本のバーをみただけでは、そのなかの値動きを知ることができません。そこでバーチャートを使う場合は、バー全体を一連の流れとしてみます。Cバーの場合、このバーの高値を含めたバー全体が、1つの安値（1つの安値の流れ）と考えます。したがって、Cバーの高値も安値の一部ですから、Cバーの高値をいったん上に抜けなければ、Eは戻り高値となりません。Cバーという1つの安値のレンジ内で揉みあって高値のようにみえても、Cバーの高値すら抜けないものを、戻す力の限界点とは考え

ません。

このような理由からTFブレイクアウトでは、バーチャートの押目と戻り高値を次のように定義しました。

- ・戻り高値とは、直近の最安値バーの高値を上には抜き、再度最安値を更新するまでにできた高値をいう。
- ・押目とは、直近の最高値バーの安値を下には割れ、再度最高値を更新するまでにできた安値をいう。

もう一度、図2-6をみてください。EはCバーの高値を上には抜けていないので、戻り高値ではありません。HはGバーの高値を上には抜けているので、戻り高値となります。

図2-7のBは、Aバーの安値を下には抜けていないので、押目ではありません。DはCバーの安値を下には抜けているので、押目となります。

3. トレンドの転換

トレンドの転換を判断する前に、必ず行わなければならないことがあります。現状のトレンドを正しく判断することです。現状のトレンドを正しく判断できなければ、正しいブレイクアウトポイントを見つけることができません。すでにトレンドが下げなのに、下げトレンドへ転換となるブレイクアウトポイントを探しても仕方ありません。

TFブレイクアウトの取引は、下げトレンドから上げトレンドの転

第4章

株式の取引

1. 株式取引について

株式は日足チャートの入手が比較的容易な銘柄です。株式も時間足を使って取引するほうが、日足を使って取引するよりも利益が大きくなり、利食い目標値で利食える可能性が高くなると思います。しかし、ほとんどの株式トレーダーは時間足の入手が困難なため、株式取引の解説では日足を使うことにします。

説明で使うチャートは、パンローリングから発売されている「チャートギャラリー」というソフトウェアです。本書の執筆にあたり提供してもらいました。わたしは株価の高値、安値、終値しかみていないので十分に使いこなしたとはいえないのですが、使い勝手が良いソフトだと思っています。

株式の取引ルール

取引のルールは次の通りとします。

- ・エントリーはトレンドが転換したときに行い、ブレイクアウトポイントで売買できたものとする（スリッページは考慮しない）。
- ・フィルターは、3ティックとし、エントリーとロスカットで使う。
- ・利食いは、利食い目標値とトレイリング・ストップ（トレンド転換を含む）で行う。利食い目標値はリスクと同額とし、リスクは高値と安値の値幅とする（フィルター分の値幅は含めない）。
- ・ポジションは売り買いともに信用取引を利用するものとし、6カ月を超えて持ち越さない。
- ・損益計算では手数料、金利、貸株料などの経費を考慮に入れない。

2. NTTをTFブレイクアウトで売買する

図4-1は、NTT（9432）の日足チャートです。権利落ちの株価調整をしてあります。順に売買検証を行っていきます。

エントリーポイント

AとCの間にある押目Bを下に割れ、Dの安値をFが更新して押目Eを形成した時点で、トレンド転換と判断します。Dの安値は169万円ですから、フィルター分の3万円を引いた166万円が売りのエントリーポイント（ブレイクアウトポイント）となり、166万円で売りポジションを建てます。

図4-1 NTT(9432)の日足チャート (1999/10~1999/12)



最初の損切りポイント

ポジションを建てた直後の損切りポイントは、直近の最高値Cの上です。損切りの場合もフィルターを使います。直近の最高値Cは194万円ですから、3万円を加えた197万円が最初の損切りポイントです。

リスクと利食い目標値

利食い目標値を出すために、まずリスクを計算します。この取引に掛かるリスクは、直近の最高値Cと安値Dとの値幅です。

直近の最高値C	安値D	リスク
194万円	- 169万円	= 25万円

利食い目標値は、安値Dからリスクを引いて求めます。

図4-2 NTT(9432)の日足チャート (1999/10~2000/1)



安値D	リスク	利食い目標値
169万円	- 25万円	= 144万円

利食い目標値は、144万円となります。

展開とトレイリング・ストップ

安値を更新するごとに損切りポイントが下へ移動するのが、TFブレイクアウトのトレイリング・ストップです。ただし、戻り高値を上へ抜けたときには移動しません。

図4-2をみてください。安値Hと安値Jは同じ値段です。同値の安値の間にある高値も戻り高値としていますのでIは戻り高値ですが、Iは戻り高値Eを上へ抜けていますので、トレイリング・ストップの

図4-3 NTT(9432)の日足チャート (1999/10~2000/1)



移動はありません。

図4-3をみてください。Jの安値をLが更新したときに、新しい戻り高値Kができました。Jの安値が更新された時点で、トレイリング・ストップは、直近の最高値Cの上から戻り高値Iの上へ移動となります。

トレイリング・ストップにも、価格のフィルターをつけます。したがって、戻り高値Iは182万円ですから、3ティック（3万円）を加えた185万円がトレイリング・ストップの価格となります。185万円になったら損切りを行います。

図4-4をみてください。トレイリング・ストップは、Lの安値を更

図4-4 NTT(9432)の日足チャート (1999/12~2000/3)



新すると、戻り高値Kの上に移動となります。図が複雑になってわかりにくい場合は、直近の戻り高値の1つ前が、トレイリング・ストップの位置だと覚えておくと便利です。

Nの安値を更新すると、トレイリング・ストップは、戻り高値Mの上に移動となります。戻り高値MとOは同じ価格です。そのような場合、安値Pを更新してもトレイリング・ストップの移動はありません。移動してもトレイリング・ストップの価格は変わりませんので、好きなように覚えておいてください。

第7章

リスクマネジメント

避けられないリスクと避けられるリスク

マーケットには、さまざまなリスクが存在しています。そのなかには、われわれ自身の力で軽減できるリスクと、回避できないリスクがあります。例えば、2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロによってマーケットがクローズするようなことは、とても回避できないリスクでした（市場参加者は、テロによってマーケットがクローズすることをあらかじめ想定してトレーディングはしないででしょう）。

本章で取り扱うリスクは、軽減することの可能なリスクです。

まず、その代表選手は、なんといっても破産リスクです。破産リスクは、トレーディングをする限りついて回ります。こちらが少し油断すると、すぐに襲いかかってきます。わたしはこれまで何度も、トレーディングができなくなるまでの資金を飛ばしたことがあります。小

口の口座でしたから、少し痛い程度ですんでいます。お金なくなることが苦痛なのはいうまでもないでしょう。

まずは、この苦痛の原因から考えることにしましょう。

1. マネーマネジメント

損失に対する心のメカニズム

破産しないまでも、投資資金を失うのは非常に辛いことです。わたしが投資を始めてすぐのころは、損失を出すたびに、その損失で「何ができた」とか「何が買えた」などと考えていました。この未練や執着は、損失を拡大させる大きな原因です。たとえ明確な損切りの基準があってもそれを実行したとしても、未練や執着から完全に脱することはできません。ましてや、明確な損切り基準を持たない手法では、損失の拡大を防ぐことは不可能です。

損失の根本的な原因は、ポジションを建てることにあります。ポジションを建てなければ損失を出すことはありません。ということは、未練や執着を持っていると、トレード自体ができなくなってしまいます。一時期わたしも、トレードができなくなってしまったことがあります。人間である限り欲望を持ち、そこから派生して未練や執着を抱くものです。また、欲望が大きければ、それだけ未練や執着も大きくなります。これを抑制してトレーディングで利益を上げるためには、1回に投入する資金の比率を小さくするのが効果的です。

投資資金の額が小さくなれば、失うことへの恐怖心はその分小さく

なります。恐怖心が小さくなれば平常心で取引に望めるのです。

つまり、資金配分がトレードをするうえで、大きなカギになります。

資金配分を上手に行って破産リスクを軽減することが、マネーマネジメントです。それでは、このマネーマネジメントについて説明していきましょう。

マネーマネジメントの役割

マネーマネジメントを一言で説明するならば、資金管理手法です。トレーディングとは儲けることがすべてです。だれもが儲けるために市場に参加していますが、全部の取引で勝てるわけではありません。勝つこともあれば負けることもあります。リスクを取ってリターンを狙うのがトレーディングですから、リスクを計算に入れて取引しなければなりません。もしも、リスクを計算に入れなければ、いずれ取り返しのつかないほどの手痛い損失をすんでしょう。

マネーマネジメントは手痛い損失を避け、かすり傷程度の損失ですませるための重要な資金管理手法なのです。

TFブレイクアウトのマネーマネジメント

TFブレイクアウトのマネーマネジメントは、いたって簡単です。手法のなかに明確な損切り基準があり、利食いの方法も決まっているからです。したがってTFブレイクアウトでは、1回に投資する資金を決定することがマネーマネジメントの目的になります。

1回にどれだけ取引するかは、資金の総額、取引にかかるリスク、負け定数を基に計算します（負け定数はわたしが作った言葉）。計算

式は次の通りです。

$$1 \text{ 回の取引数量} = \text{総資金} \div (\text{リスク} \times \text{負け定数})$$

このなかの総資金の額はわかっているはずですが。資金がどれだけあるかは、取引口座の残高をみればわかります。また、取引にかかるリスクは、ブレイクアウトポイントが出た時点でわかります。これまで説明してきた通り、ブレイクアウトポイントから最初の損切りポイントまでの値幅がリスクです。

負け定数とは、連続して負ける可能性のない数です。バックテストをしていると、負ける取引が連続することがあります。わたしの経験では、3回連続して負け取引になることが時々あります。まれに4回連続して負けこともあります。しかし、5回連続して負けたことはまだありません。したがって、5以上が負け定数となります。

バックテストで連続した負けが4回あったとすると、これからも4回連続して負けることがある可能性は高いでしょう。それでは5回連続して負ける可能性がないのかといえば、そんなことはありません。連続して6回でも7回でも負ける可能性はあります。ただし、6回よりも7回、7回よりも8回と数が多いほど発生する確率は低くなります。おそらく10回連続して負けることはないと思いますので、負け定数を10とします。

負け定数はそんなに難しく考える必要がありません。ただし、数を多くすれば破産リスクは低くなりますが、儲けも少なくなります。その辺を考慮して、任意に決めてください。

資金配分

では、1000万円の投資資金があると仮定して、資金配分を試みることにしましょう。

負け定数が10、証拠金が1枚50万円で、1回の取引リスクを10万円とします。公式は、1回の取引数量＝総資金÷（リスク×負け定数）ですから、これに上記の数字を当てはめます。

$$1000万円 \div (10万円 \times 10回) = 10$$

公式によると、1回の取引で、10枚のポジションを建てるのが可能となりました。1枚あたりの証拠金は50万円ですから、10枚建てても500万円です。証拠金の額も問題ないので、ポジションを10枚建てたと仮定しましょう。

次にこの資金配分方法で負け続けると、取引枚数がどう変化するかをみることにします。

リスク10万円の取引で、10枚ポジションを建てて負けると、100万円の損失です。しかし、実際の取引では損失額はこれよりも多くなります。取引手数料やフィルター、スリッページが発生するからです。しかしこの検証では計算が複雑になるので、それらを考慮しないでおきます。実際の取引では、決済後の口座残高を使ってマネーマネジメントを繰り返しています。

取引によって発生する損失は100万円ですから、投資資金残高は900万円になります。900万円の投資資金を前と同じ条件で計算します。TFブレイクアウトのマネーマネジメントでは、減った残高を使

ってマネーマネジメントを繰り返します。

$$900万円 \div (10万円 \times 10回) = 9$$

今度は9枚の取引が可能です。

この取引で負けたとすると、9枚×10万円＝90万円の損失です。資金残高は900万円－90万円＝810万円になります。

この続きは、図7-1をみてください。表のいちばん下が31回となっています。この方法を採用するのなら証拠金の50万円が割れるまで取引を続けることが可能ですから、もし31回連続で負けたとしても、まだ取引ができることとなります。

この検証では、負け定数を10として説明しました。初めに少し説明したように、負け定数を任意の数字に変更してポジションの大きさを決定することができます。ポジションの大きさは、収益を大きく左右します。

次に、負け定数を変えたときの取引回数を比較するための図7-2をみてください。これは負け定数を5回にして計算した表です。1回の投資金額が大きくなりますから、負けるときの損失も大きくなります。したがって、資金が底をつくまでの回数も少なくなります。

負け定数をいくつにするかは、取引スタイルなどによって、人それぞれで異なってきます。負け定数を小さくすると、取引を行うときの精神的な負担が大きくなるので、わたしはあまり小さくしていません。気軽にポジションを建てるためにも、負け定数は10程度が良いと思います。

あとかき

本書を書き上げるには、とても多くの時間がかかりました。2001年の10月ごろには出版の話が決まり、2002年の2月には原稿を上げる予定でしたが、結局1年以上かかってしまいました。本書を編集していただいたマイルストーンズの細田聖一氏には、ご迷惑をかけたと思っています。また、氏の指導がなければ、文章を書くなどということはできませんでした。感謝します。

実は為替取引の原稿を書いているころ、出版を中止しようかなと思ったことがあります。それは、自分がトレードしている為替取引があまりに儲かったからです。こんなに儲かる方法は本を書いて人に教えるよりも、だれにも教えないで自分ひとりでやったほうがよいと考えるのは人の常でしょう。

そんな時期、人生の師匠ともいえる人から1枚の色紙をいただきました。仏教の八正道（はっしょうどう）が書かれたものです。八正道とはお釈迦様の教えで、人間は生きていること事態が苦しみであり、その苦しみから逃れるための8つの方法を示しています。

人間の苦しみの多くは、欲から派生する未練や執着がもたらします。わたしの悩みも、お金に対する執着と、せっかく作り上げたものを手

放す未練からきていたのです。

八正道の1つ正定（しょうじょう）では、正しい瞑想を説いています。瞑想では、すべてのことから精神を解放し、精神を無に集中させます。無はすべての始まりであり、無であるから新しいものを手にすることができるのです。

わたしもこれにならない、自分の持つすべての知識を公開して、無になることにしました。

これからがわたしの新しい第1歩の始まりです。

本書では手法をわかりやすく説明したつもりではありますが、執筆という作業に不慣れなため、説明が十分でないところもあると思います。もしも、理解しづらい個所がありましたら、メールで質問してください。できるかぎり返答をしたいと思っています。また、わたしのホームページでも随時、手法などを公開していくつもりですから、ご覧くだされば幸いです。

メールアドレス info@tokyofox.com

ホームページ <http://www.tokyofox.com>